中世日本文学

中世日本文学

斎藤清衛

筑摩書房

斎藤清衛（さいとう　きよえ）

1893年　山口県に生まれる
1918年　東京大学国文科卒
1981年　没
主　著　「国文学の本質」「近古時代文芸思潮史」「南北朝時代文学史」「批評文学」「精神美としての日本文学」ほか多数

中世日本文学　　筑摩叢書 129

昭和44年2月5日　初版第1刷発行
昭和60年5月30日　初版第3刷発行

著　者　斎藤清衛
発行者　布川角左衛門
発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
電話 東京 (291) 7651 (営業)
東京 (294) 6711 (編集)
振替 東京 6—4123番
郵便番号 101—91

Printed in Japan

1091—01129—4604　　理想社印刷・永興舎

乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが，小社読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

はじめのことば

およそ中古中世文学は上代文学と近世文学とを繋ぐ「中つ世」の精神を表明する文学である。そこは人性の高さを示す二つの峰に挾まれた幽谷であり、狭谷であり、霊谷であって、プラトーのイデアのごとく、ショーペンハウエルの無意志的認識の存する芸術の世界にも通う。美の国なる日本が、その原郷をかかる中世に持つということはさらに不思議とすべきではない。本書は、余の中古中世文学観の一素描にすぎないけれど、極めて試論的なこの計画を読者諸子によって多少ながら好意を寄せられ共鳴されることを得るならば甚だもって欣幸とするところである。本著述は、私の三十余年前のものである。その後、国文学史の研究が進み、特に中古中世時代(平安と鎌倉室町文学)の検討は微に入り細に入っている。本書の跡を顧る心忸怩たるものがあるが、このたび筑摩書房の勧めを容れて新版としたものである。もっとも現代に理解されやすくするために新仮名遣いを使い(引用の項は原文のまま)、また僅かながら辞句を書きかえ増訂し、併せて注釈の部分をより詳しくした。

昭和四十三年秋

著　者

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

はじめのことば

序説　魂の漂泊……9
奈良朝と船載文化——平安京と異国精神——藤氏の専権とその犠牲

第一章　浪漫的思想……23

一　フェミニズム……25
女性と学識——女性の社会的地位

二　夢幻的傾向……37
物語美への憧憬——恋愛至上——花実相兼

三　「はかなし」と「あはれ」……49
はかなき心——秋心——旅愁

四　「あやし」より「あぢきなし」へ……67
あやしきもの——物狂おしき世相——
あじきなき心

第二章　みやびの表象……85

一　自律性の発展……87
倫理性——実の尊重——自照の表現

二　優雅精神……101
「いう」と「らうらうし」——心用意
——抱愛の心——故実味

三　文学的生活……119
制作の心境——詠歌の生活化——
競詠心理

四　風情としらべ……134
風情美——しらべ——あえかなる内容

第三章　礼讃と幽艶……149
一　現実厭離の傾向……151
漂う魂――美的宗教――流離の文学
二　浄土欣求の思想……172
彼岸の観念――平家物語の心――
宗教・文学の融一
三　幽艶の文学……193
すき・あそび――文様の艶麗――
幽玄の美
四　英雄への讃美……208
英雄への驚異――文武両道
第四章　自適と逸狂……217
一　閑逸と自然……219
隠栖――庭苑美――傍観性

二　自適と無為……234
自適の心——道教的思想——禅学的思想
三　淡雅と放曠……247
淡雅の味——放心——修辞上の機巧
結　言　道の発見……263
一　文芸道の樹立……265
道の自覚——道への悟入——俳諧の風雅道
二　空無の芸術……278
否定する心——虚の文学——句をすてる
注　293
附録
(一)　中世時代表目　315
(二)　人名書名索引　322

中世日本文学

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序説　魂の漂泊

魂の漂泊

一　奈良朝と舶載文化

未だこの国が低い程度の文化しか持たなかったとき、急激に高度の異国文化に接したけれど、幸いにその文化の輸入を受ける状況が、秩序立っていた。乳飲児が、一時に好物を与えられて不消化を起すような危険なしに済んだ。これは、西紀二百余年代頃から七百五十年頃にかけてのわが国における舶載文化の特色をいったものである。

考えて見ると、この天佑は、わが国が東海の一孤島であるという地理的原因に負うものが多い。そこには、朝鮮半島が支那大陸に対する地位に比較すると、それとははなはだ遠いものがあるし、西洋において、南欧的のローマ帝国が、ギリシャの文化を継承したその地理的関係とも、はなはだ性質を別にしている。

といって、禍を免れえたことを、環境の賜物とばかりに帰することは出来ない。記録の少い藤原奈良朝以前のことは確実に考証することが出来ないけれど、仏教の普及や大化の新政やの中に、律令の撰定や、国史の編纂や、国歌集の撰述やの行われていた史実には、少くとも民族的精神の蠢動

を認めることが出来る。

しかし、一たび、大陸文化崇拝熱が、平安京建設というような、具体化をとってくると、その事情は一様にいかなかった。明治時代における文明開化思想や欧化熱やも、今から回顧して見ると、かなり無軌道のものがあったけれど、上代における異国の高度文明の輸入は、ほとんど、下地のないところへ行われただけに、たとえば、田舎出の一少年が大都市のまん中に立たせられたようなものであった。自己に対する、はっきりした認識を持たない原始人の精神に、比較の出来ない高級文明が掩いかぶさってきたのだから、反省のありようがない。舶載文明の内容が、唐代のものであったために、この国はローマの二の舞をせずにすんだものの、もし、相手が、肉酒あり、パンの神*であったら、どうなっただろう。この国に、カリギュラ*が生れなかったということは必ずしも保証の出来ないことであった。

しかし、元正天皇*の朝には、五百五十余人の留学生が派遣された。彼等は、玄宗時代における唐代の艶麗の文化にひたって、わが天平時代前後に帰朝したものの、その人々は、学者ではなく、多く、僧侶であった。すなわち、朱雀大路を中央にする洛内洛外に、壮麗雄大な寺院伽藍(がらん)が次々に建てられ、当時の天子であった聖武天皇*は、自ら「三宝*の奴」と称されて、譲位の後は、薙髪して勝満と号し、仙洞の御すまいに満足され給うた。なお諸国には、国分寺、国分尼寺が建立され、それぞれが地方文化開発の上に好箇の門戸となってきたのである。

すべて精神生活の深化に伴い、物質内容の充実に対して、飽くなき意欲を示すことは、文化そのものの本然性であるらしい。従って、霊魂の浄化と救済とを生命とする宗教とても、一たびそれが

文化の要素に加えられるや、造寺、写経のごときはむろんとして、雑多な形式がこれに附け加わってくる。聖武帝はその即位第二年に僧侶六百人を集めて、宮中に大般若経*の転読をなさしめ、九月には、天下の災異を除くために三千人の者を得度せしめられた。さらに第四年目には、僧侶九百名を宮中に集めて金剛般若経*を読ましめ、第五年目には、皇太子基王の疾病平癒の目的で、観世音菩薩像百七十七軀、並びに経典一百七十七巻を造らしめられた。この類の事蹟はほとんど挙げるに遑のないほどであるが、天平十五年に到り、聖武帝にとり、畢生の大事業となった金銅毘盧遮那仏*、すなわちいわゆる、奈良大仏の鋳造を見たということは、奈良仏教の本質をそのままに象徴している。すべての努力は、現世の福祉を禱ることを第一の手段とし、積極的に権力と富とをもって、絢爛たる伽藍や神厳な仏像を造る儀軌的完備の方面にのみ差向けられたのである。ここに、国家的の供養や祈願やを通し、国民は宏く普く仏光に浴すことは得たとしても、各個人の持つ信仏的欲求が満足されるということなどは、まずむつかしいことと見なすべきであった。

しかし、ただ、この厳粛壮麗な殿堂の中に、慈顔溢れるばかりの仏像を拝するとき、難解な経典教義は別として、ある永遠的のものがそこに直観されたであろう。各々が抱いているごとき小さい問題も、この感激の中には一つの泡沫にだも値しなかったかもしれない。

これは、奈良仏教だけでなく、あらゆる輸入文化、例えば、文学についても考えられる。当時、外来芸術の一つとして漢詩を作ることが流行した。懐風藻*という詩集の編纂も、大仏鋳造を去る七八カ年の後のことである。すべて支那六朝*の古詩を模倣したもので、平仄*の合わないものも多い。しかし、一般の文化の水準よりすれば、辞句の使用といい、形式の随順といい、移植の方法は優れ

たものと見做さなければならない。さながら、鋭い直観の力に訴えて、ひたすらに仏教を崇拝するに到った、そうした径路にも似ている。それらの作品には、仏教だけでなく、儒教や道教やの思想が素材に採られているのも多い。

が、かような鋭い直観力は、たとえば、子供の持つ勘に類して、進んで思弁の網を潜るほどの宿命をその中に負うている。天平仏の持つあの素樸な神秘的崇厳さも同様で、時間の世界においては、やがて破砕されて、再生さるべき運命を自己の中に担っている。それは、遅いか速いか要するに時間上の問題であって、そのまま結晶することは到底許されていない。そして、魂のみは、置いてきぼりにされながら流れに漂う小舟のようにいつまでも漂泊を続けねばならないのである。

和歌は、これら漢詩に比べると、大陸文化の影響を被るところはなはだ少い。しかし、大津朝から奈良朝の前期にかけて、多くの万葉歌人を輩出せしめたほど、未曽有の高潮期を出現するに到った。その間接の動機は、大陸文化の刺激である。澎湃とした固有民族精神の勃興に、反動時代の来たことは、その崇高雄大な調べが、天平以後には、見る見る凋落していったというその事実をもってするも明らかであろう。

万葉集の編者に擬せられている大伴家持*はこの転向期における文学者の一代表である。彼は、カタルシス*であると共にリュクレチウス*的でもあったようだ。彼は彼をめぐる多くの美しい女性との愛の交渉を有し相聞の歌もたくさん詠じている。しかも、弱々しい彼の意思は、その歌のように恋を弄び、恋に媚びる以上のものでなかった。ここに、現実とロマンティシズムの儚い分離が暗示されている。また、彼はその感傷を自然に托して歌った。それは、家持自らの個性といわんより、時

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com